

ひょうご 水百景

No.74 生田川（神戸市中央区）

～濁流奔騰の修羅場と化した阪神大水害からの復旧・復興～



写真-1 布引橋から新神戸駅を撮影（平成 29 年 5 月）

■ 神戸のシンボルリバーとして整備～「ふるさとの川」モデル事業の兵庫県第 1 号

写真-1 は、新幹線・新神戸駅の下を流れる生田川です。

都市の貴重なオープンスペースである河川空間を「うるおいとふれあい」のある水辺として整備してほしいという全国的なニーズの高まりを受けて、昭和 62（1987）年 12 月建設省（現・国土交通省）において「ふるさとの川モデル事業」制度が創設されました。生田川は、同年度に建設省からモデル河川の指定を受け、学識経験者を中心とした「生田川全体構想計画検討委員会」において環境整備計画が策定されました。

この計画に基づき、JR 新神戸駅前の「生田川ふれあい広場」の整備が、昭和 62（1987）年度に着工し、神戸市制 100 周年に当たる平成元（1989）年の 3 月末に完成しています。

桜の名所としても知られる生田川は、すっかり神戸のシンボルリバーとして定着し、多くの市民が訪れ、市街地における市民のオアシスとなっています。

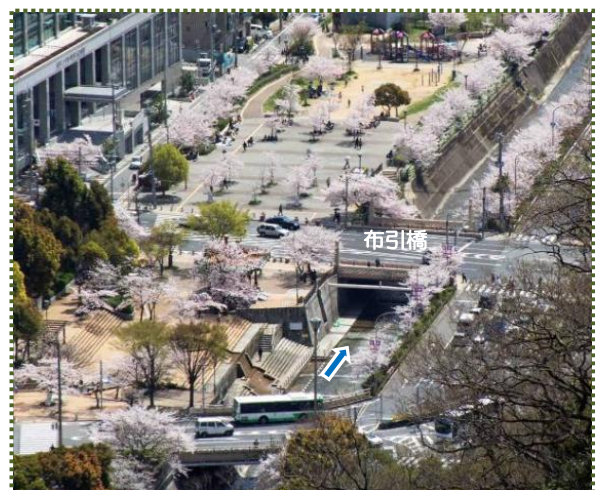


写真-2 湊山城址への登山道から桜が満開の生田川を撮影

■ 大水害復興の苦心～神戸市復興部長 富田恵四郎氏の回想（復旧編）

昭和 14（1939）年 6 月 16 日から 29 日に神戸新聞に連載された神戸市復興部長・富田恵四郎氏の回想記事（「神戸大学経済経営研究所 新聞記事文庫」に収蔵）から、生田川関連の復旧作業の部分を抜粋して掲載します。（一部現代文に書き換えて読みやすくしています）

工兵隊の手で暗渠の天井を爆破

激流は加納町交差点付近から浸水面積を増大して行ったが、水の引き去った街の姿は全く目もあてられない。加納町付近の電車の架空線が足元に引っかかって歩行の妨害となっていた。どこからこれ程の土砂が流れて来たかと思われる程だった。一面の河原と化した川崎邸の庭園の謎は今にして当時のまま残っているが、門の屋根だけがちょうど摺鉢を伏せたように砂の面に顔を出している。

復旧は容易な作業ではない。国道の滝町付近を流れる水のため道路上に仮橋を架設して東西の交通を図り、乱流する水を道路の両側に土俵を積んで流心をつくる応急工事を行ったが、暗渠の入口を掘削して氾濫する水を取り入れ、広範囲の浸水より一刻も早く救うことが焦眉の急であり、それまでは被災者が避難場所から家へたどりつく事も出来ない。ここにおいて暗渠入口掘削と一決した。何と言っても地平面下三十余尺の谷底に入口のあった布引谷が、谷の上の道路と同じ高さまで土砂・岩石・流木で埋め尽くされ、果たしてどの辺が入口か見当のつけようがない。見覚えのある家屋は流れ、樹木は埋まり、道路は跡形もない。残っているのは加納氏の銅像一つである。

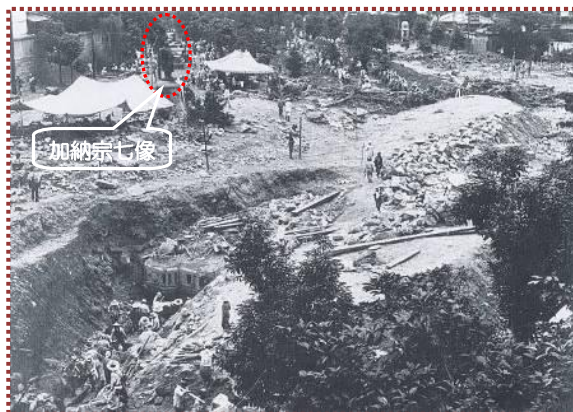


写真-3 災害直後（7月9日）の暗渠入口付近
（『神戸市水害誌・附図』から引用・加工）

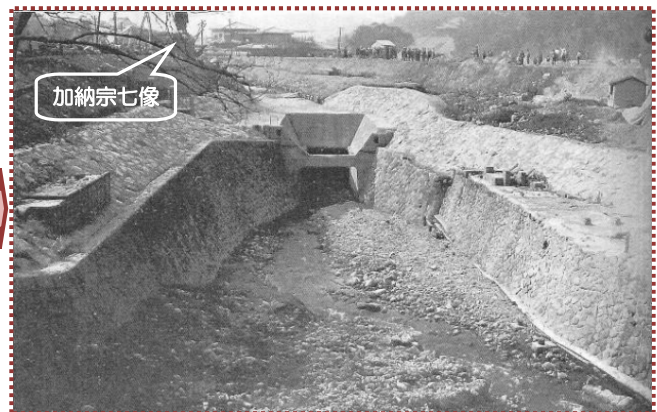


写真-4 土砂除去後の暗渠入口付近（10月7日）
（『神戸市水害誌・附図』から引用・加工）

この銅像で大略の見当をつけて、人夫千人余を動員して掘り出し作業にかかったが、三時間交替による突貫工事である。三日間昼夜の区別全くなく、人夫を家に帰すと疲労を一時に覚えて出て来ない。やむを得ずテントを張って呷（かます）を敷き、缶詰めにして百燭光の電灯を三百余個臨時点灯し、真裸に血のにじむような命をかけての大作業を続行する一方、暗渠の下流マンホールより内部に入り詳細に調査した結果、入口より 50m 付近までは全く閉塞されているが、以下は全く土砂のないことが判明、そこで入口より下流 130m の箇所を掘り下げ、暗渠の天井を打破り、水を暗渠上に流して暗渠に流入させることとし、工事は二班に別れ入口を掘り出すとともに暗渠上の仮水路工事にかかったのであるが、暗渠の天井は極めて強固な鉄筋コンクリート造りである。これを打破る事は容易な作業でなく、このような事態を受けて急遽、高槻工兵隊の出動を見たのである。

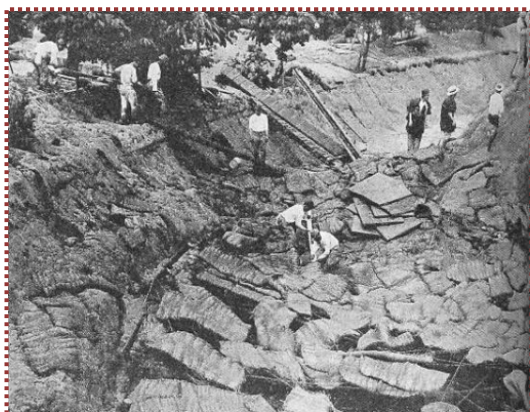


写真-5 爆破の準備：防爆シート代わりにムシロや畳を敷き詰めている
（『神戸市水害誌・附図』から引用）



写真-6 7月11日午後5時20分 暗渠天井部爆破の瞬間
（『神戸市水害誌・附図』から引用）

(11日) 工兵隊によって見事暗渠の天井が爆破され、摺鉢形に呑口を仕上げ仮水路工事を終えた頃、一方の暗渠入口も遂に発見、少量の水を流入させながら作業を進めるうち次第に通水量を増し、7月15日平水を全部流し込めるようになったが、これと同時に入口西側に掘削した土砂で堤防を築いたため、加納町から南一帯滝道方面の数日にわたる道路上を流れる水は全く止まり、本格的に土砂除去工事に取りかかることが出来たのである。

その後、8月2日夜来の猛雨強襲に徹夜で警備中の係員は非常に憂慮していたのであるが、幸なるかな他の河川の復旧を一度打破ったこの雨が、生田川においては実に偉功を立てたのであった。すなわち水勢の一時に強まるや今の今まで閉塞された暗渠入口をチョロチョロ流れていたものが、急激な水力によってドッとばかりに閉塞土砂を押し流し、万雷の一時に落ちたかと思うような爆音を立てて、寸時にして暗渠が全通し、入口は完全に広がり濁水は見るも気持ちよく入口に渦巻きつつ吞まれて行くのであった。係員一同は手に手を取って躍り上って喜んだのであった。

■ 膨大な量の堆積土砂を除去

災害科学研究所の調査によると、生田川における堆積土砂量は約47万立米で、この膨大な土砂の除去については、滝道付近・加納町三丁目に至る区間は貨物電車により搬出し、その他はトラックにより搬出したそうです。また、居留地一帯は商工会議所の手で除去され、生田川周辺地域が平常に復したのは8月中旬だったとか。



写真-7 加納町交差点での復旧作業 (7/8)
(『神戸市水害誌』から引用)

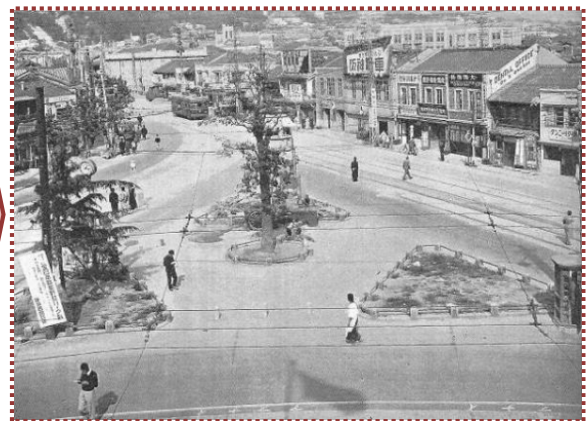


写真-8 復旧後 (10/8) の加納町交差点
(『神戸市水害誌』から引用)



写真-9 災害直後 (7/8) のそこ前
(『神戸市水害誌』から引用)



写真-10 復旧後の国際道路 (10/8)
(『神戸市水害誌』から引用)



写真-11 国際道路の復旧作業（7/8）
（『神戸市水害誌』から引用・加工）



写真-12 復旧後の国際道路（10/8）
（『神戸市水害誌』から引用・加工）

■ 阪神大水害を伝える

加納町 3 丁目交差点にある歩道橋の下に、「水害復興記念碑」（写真-13）があります。

ちょうど 3 回忌にあたる昭和 15（1940）年 7 月頃に建立されたもので、当初は一宮交番のすぐ東に設置されていたものを、平成 19（1944）年 3 月、「水害復興記念碑を保存する会」の手で現在地に移設されたそうです。

災害直後の加納町 3 丁目交差点付近は、写真-7 のように濁流で市電が脱線し架線が垂れ下がっていました。

上流の布引貯水池には大量の土砂や流木が流入し、その除去作業が大変だったようですが、もしこのダムがなかったら生田川下流域の被害はさらに大きなものになっていたはず（『ひょうご水百景』No.14 参照）。



写真-13 加納町 3 丁目交差点にある『水害復興記念碑』

水害復興記念碑

昭和十三年の豪雨は前月末の連続降雨に一層の猛威を加え、芋川布引溪谷は樹木土砂を崩壊流却して濁流滔々更に間の谷櫻谷よりの奔流を加えて、猛然として加納町に襲来し、街路は忽ち濁流奔騰の修羅場と化し、僅々時余にして惨死者十二名を出し、家屋の被害全半壊埋没等実に二百二十有余を算するの惨状を呈し、豪雨収まるも猶街路は茫漠たる礫と化し土砂の堆積丈余に達し、その間の貫流する河谿には流木を架して僅に両側の通路に資するのみ。悲惨凄愴実に筆舌に絶するものあり。町民は少数の自宅残留を除き咄嗟の間辛うじて塩原学園藤井忠兵衛、近藤忠吉、三友俱樂部、イスタンロツジ各邸に避難して繰（わすか）に其身を遁（のがれ）るを得たり。此の突発惨憺たる光景の中に町会役員を非常招集して復興団を組織し役員自ら幹部となり義捐金募集、對外連絡、復興人事、組織、炊出及救済品配給、土砂除去作業等の部門に分ちて大活動を開始し、市当局の諒解の下に町民の一系列れざる協同努力と各方面の後援により苦難の復興実績も大に進捗し、九月一日には早くも市電の開通を見るまでの復興を完成したり。之に従事せし人員は延数実に一万七千五百余名、之に要せし経費金九千六百円なり。嗚呼大自然の暴威戦慄の惨禍は斯くして復旧せり。今往時を追懐して轉た（うつた）感慨に堪えざるものあり。茲に刻し以て記念とす。

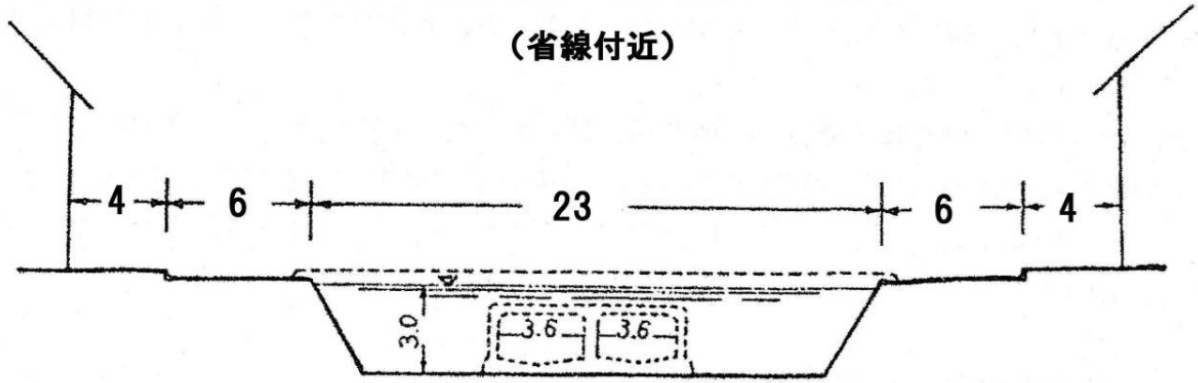
神戸区加納町二丁目発起人

昭和 13（1938）年 10 月 21 日、神戸市域では生田川を含む表六甲の 16 河川が、旧河川法に基づく準用河川に認定され、河川復興工事は内務省の直轄施工とし神戸土木出張所が担当することとなりました。

生田川の改修は、暗渠底面を河床とする開渠とし、川幅は 15m、河口部で 23m、急勾配であることからすべて床張工を施工することとなりました。

図-1 暗渠断面と復旧断面の比較

(省線付近)



『神戸市水害誌』附図から引用・加工

■ モノローグ

今年(令和8年)は、阪神大水害から88年目の年、ということは昨年が米寿だったということです。加えて、今年は昭和42年災害から59年目、来年は還暦を迎えることになります。

昭和42(1967)年災害の時は、昭和13(1938)年とほぼ同量の雨量でしたが、阪神大水害以降生田川流域においても13基の砂防堰堤が建設されるなど、治山・砂防施設等が整備されていたため、大規模な土石流が市街地に流れ込むことはありませんでした。

ただ、『ひょうご水百景』No.14にも書いているように、生田川上流の世継山西側斜面で大規模な斜面崩壊が発生し、土砂は布引貯水池に流入して止まりましたが、残念ながら21名の尊い命が失われました。

そのため、さらに砂防堰堤が15基増設されて今日に至っています。災害対策に終わりなし!!

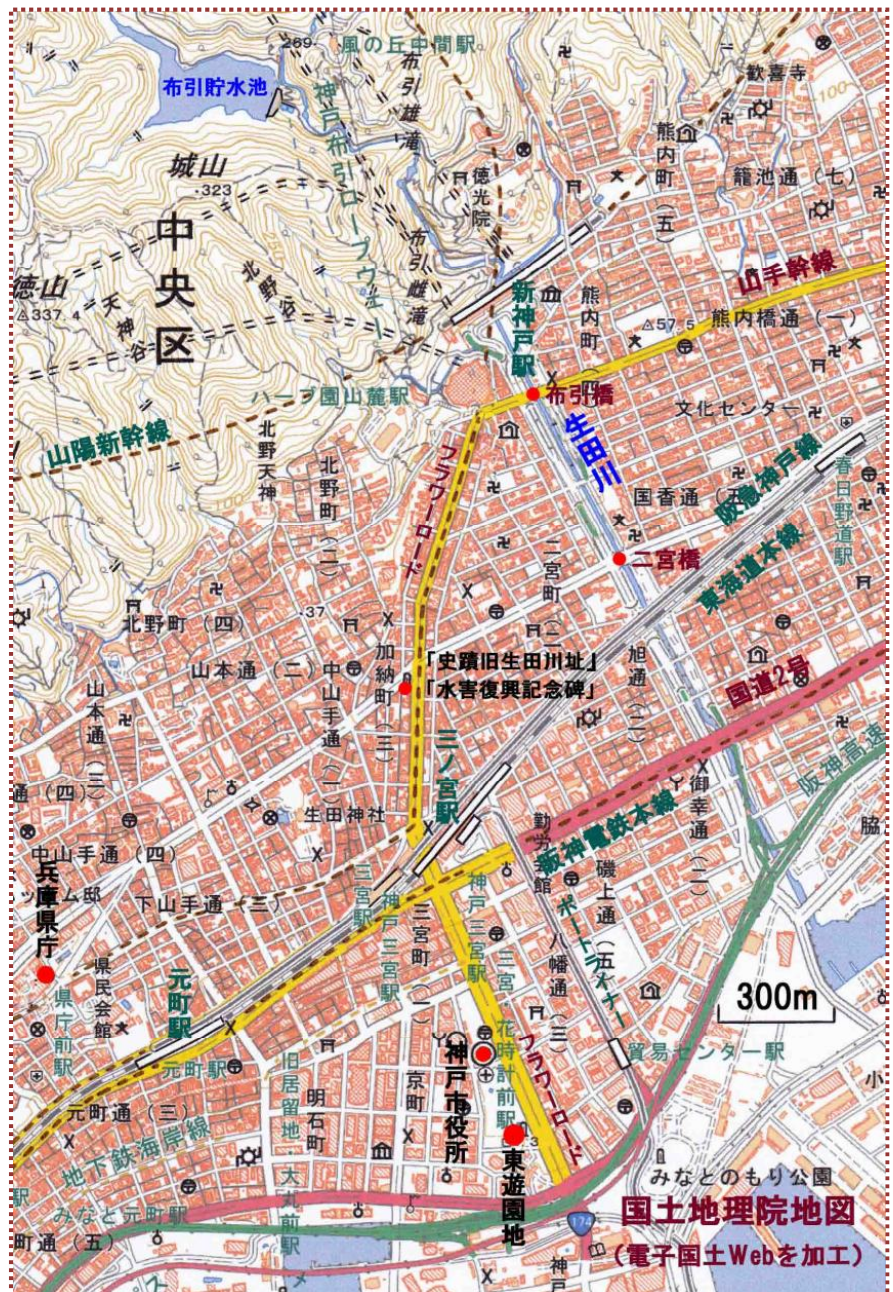


図-2 生田川周辺域の地図

アジサイ（紫陽花）

アジサイ科アジサイ属の落葉低木。雨が似合う花ですが、今年はそろそろ梅雨入りしそうです。フラワーロード沿いには青、白、赤、ピンクのアジサイの花がもうすぐ咲くと思います。そういえば、アジサイは神戸市の花。花びらのように見える部分は、葉が変形した萼（ガク）と呼ばれるもの。アジサイといえば、三室戸寺（宇治市）のアジサイが有名です。筆者も平成 29 年 6 月中旬に行きましたが、いろんな種類のアジサイの花が楽しめました（写真-15～17 参照）。



写真-14 加納町交差点付近に咲いていたアジサイ



写真-15 三室戸寺のアジサイ



写真-16 三室戸寺のアジサイ



写真-17 三室戸寺のサジサイ

【参考資料】

- 1 『新修神戸市史・産業経済編Ⅲ 第三次産業』 神戸市 平成 15 年 3 月
- 2 神戸大学経済経営研究所 新聞記事文庫 道路（03-158 神戸又新日報 1927.6.4） 都市（10-116 大阪朝日新聞 1927.6.4）
- 3 『葎合ものがたり』 葎合区役所 昭和 52 年 3 月
- 4 『六甲山災害史』 兵庫県治山林道協会 平成 10 年 8 月
- 5 『神戸市水害誌・附図』 神戸市役所 昭和 14 年 7 月
- 6 『全建ひょうご 通巻第 56 号』 兵庫県建設技術協会 平成元年 7 月

※発行：平成 29（2017）年 7 月 『ひょうご水百景』 No.74

改訂：令和 8（2026）年 6 月 『ひょうご水百景』 No.74